

第1章

家事使用人として働く 3人の女の子



雇い主の子どもの世話をする11歳のルビナちゃん

ルビナちゃん（11歳）は、8歳から家事使用人として働いています。家族が住む家はスラム*の中にありますが、雇い主の家に住み込みで働いています。

ルビナちゃんの雇い主は、銀行で働いており、バングラデシュ*の首都ダッカ市内で中流家庭が多く住む、ミルプールに暮らしています。ルビナちゃんのほかに、2人のおとなの女性を家事使用人、つまりメイドさんとして雇っています。雇い主は5人家族で、掃除、洗濯、買い物、食事の支度、子どもや老年寄りの世話など、家の仕事は3人ですべてやっています。

バングラデシュ人の夕食の時間はとても遅く、夜10時ぐらいにならないと終わりません。ルビナちゃんたちは雇い主の家族が食事を終えるまではそばについて、つきつきりでお世話をします。後片づけが終わるまでは夕食を食べられません。

ルビナちゃんには自分の部屋が与えられておらず、雇い主の家の子ども部屋のソファで寝ています。雇い主にもありますが、女の子に部屋を与えずに台所

*スラム：貧しい人たちが集まって暮らす地域。途上国の大都市に多くみられる。生活環境、衛生状態が悪く、強制的に住民が追い出されることもある。

*バングラデシュ：ベンガル語でバングラは「ベンガルの」、デシュは「国」。人口は世界8位、世界で最も人口密度が高い国の1つ。かつてはイギリス領インドで、1947年にヒンドゥー教徒が多い地域はインドに、イスラム教徒が多い地域はインドに、イスラム教徒が多い地域は東西にわかれたパキスタンとして分離独立した。その後、公用語をめぐる独立戦争が勃発し、東パキスタンがバングラデシュとして1971年に独立。西パキスタンは現在のパキスタン。



台所で1人残りものを食べる家事使用人の女の子

首都ダッカにあるスラム。トタンでできた簡素な家が密集し、洗濯物を干す場所もない



の床やベランダで寝かせているケースも多々あります。

ルビナちゃんは11歳なのに学校に行っていない。仕事にさしかえるので雇い主が学校に通わせてくれないのです。8歳になる雇い主の子どもは学校に通っています。ルビナちゃんは雇い主の子どもを朝学校に送っていたり、夜寝かせる前に話を聞いてあげたりします。

ルビナちゃんに「なにがしたい？」と聞いてみると、「学校に行きたい」「遊園地や動物園で遊びたい」といいます。また、「食べ残しを食べさせられるのはイヤ」ともいっていました。ルビナちゃんは、雇い主の家族が食べ残したものを、それも何日かたってから食べさせられることがあるというのです。

ルビナちゃんの家は同じダッカ市内のスラムの中にあるため、住み込みで働いている家から歩いていける距離に家族が暮らしています。しかしこれは稀なケースで、住み込みで働いている女の子の場合、遠く離れた農村^{*}から出稼^{まね}ぎに來ていることが多く、実家に帰れるのは年に1度か2度、イスラム教のお祭りであるイード^{*}のときに限られます。

バングラデシュでは、イスラム教のお祈りの日である金曜日と、土曜日が休日、学校や職場はお休みです。でも、ルビナちゃんには週末の休みもありま

^{*}バングラデシュの人口の62%は農業で生計を立てており、70%以上の人びとが農村に暮らしている。

^{*}イスラム教：世界で2番目に信者の数が多い宗教。世界に16億人以上のイスラム教徒があり、年々その数は増えている。唯一神アッラーを信仰しており、1日5回決まった時間に、サウジアラビアのメッカの方向を向いてお祈りをする。ほかに、お酒を飲むこと、豚肉を食べること、女性が肌を見せることの禁止など、さまざまな決まりがある。

^{*}イード：イスラム教の祝祭。1年に2度おこなわれ、イスラム暦10月の「断食明けの祝祭」（48ページ参照）と12月の「犠牲祭」（49ページ参照）がある。どちらも1週間ほどあり、イスラム教を信仰する人びとにとっては大切な行事。



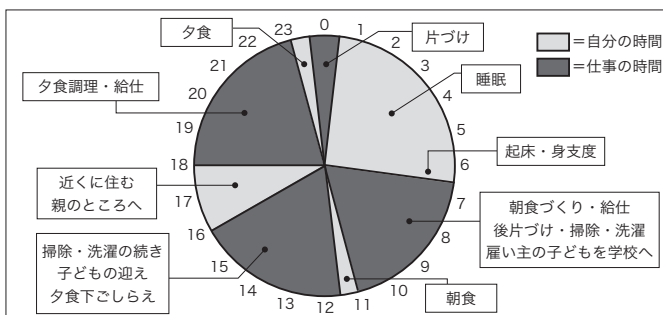
掃除機を使っている家庭は少なく、水拭きは家事使用人の女の子の日課

せん。ルビナちゃんたち使用人は、朝から晩まで週7日間、休みなく働きつづけます。雇い主の家で寝起きをしているので、いつでも用事をいつつけられるのです。

ルビナちゃんは、朝6時半から夜中0時過ぎまで、ほとんど休むことなく働いています。決まった休憩時間はありません。夕方の4～6時までの2時間は、時間がとれることがあります。この時間に実家のあるスラムに帰って、親の顔をみて戻ってきます。こんな毎日なので、学校に通うことはできません。

雇い主の子どもの学校の送り迎えだけではなく、翌日の持ちものの準備もルビナちゃんの役目です。11歳の女の子が、雇い主の子どもの身の回りの世話をしているのです。ルビナちゃん本人もその境遇を「あんまりだ」と嘆かないわけではありません。それでも生きるためにはしかたがないと自分にいい聞かせながら働いています。ルビナちゃんのような女の子が、バン格拉デシュだけで33万人もいるのです。

■家事使用人として働くルビナちゃんの1日



*バン格拉デシュでは、家事使用人として働く子どもが42万人おり、そのうち8割が女性、2割が男性となっている。

8歳で家事使用人になったジュマルさん

ジュマルさん（17歳）は、生後7カ月でお母さんを亡くしました。その後お父さんは再婚し、ジュマルさんたち4人のきょうだいを置き去りにして、インドのコルカタ*に行つてしまいました。ジュマルさんには、お兄さんが2人、お姉さんが1人いて、きょうだい4人でバン格拉デシュ南部のポトアカリ県のおばさんの家で暮らすことになりました。近くの小学校に入学しましたが、生活が苦しくなり、8歳のときにダッカに家事使用人として出されてしまいました。

ジュマルさんの雇い主は、いまはダッカに住んでいますが同じ村の出身です。村ではジュマルさんの面倒をみってくれる人がいないため、ダッカで成功した人を頼つて1人で出されたのです。お兄さんのうち1人は大工、もう1人は薬局で働き、お姉さんはお店の販売員をして、おばさんの家計を助けています。

ジュマルさんの仕事は、はじめは雇い主の幼い子どもの遊び相手でしたが、

●手洗いなので、家族全員分の洗濯が一番の重労働



*コルカタ…インド東部にある都市で、バン格拉デシュと同様にベンガル語が話されている。インドでは、デリーとムンバイに次ぐ3番目に人口の多い大都市である。

だんだん仕事の量が増え、9年目になるいまでは、掃除や料理もしています。雇い主は、ジュマルさんに毎月の給料を渡さずに、将来の結婚のために貯めているといっています。ジュマルさんが自由に使えるお金はなく、いくら貯まっているのかも知りません。もし雇い主の仕事がうまくいかなかったら、貯まっているというお金を使われてしまうかもしれません。きちんとした契約関係がないので、金額がごまかされていたとしても確認することができません。

それでも、ジュマルさんの雇い主は比較的理解のある人で、家事使用人の子どもを対象とした支援センター*に通うことを許してくれています。この支援センターはNGOが運営していて、友だちをつくったり、文字の読み書きや計算、仕事の仕方を学んだりすることができます。

ジュマルさんは15歳の頃からこの支援センターに通っており、最近は染めものやペーパークラフト、アクセサリーづくりも学んでいます。将来は、結婚をして食品販売の仕事をしたいと考えています。このセンターで友だちと話したり、学んだりすることで将来を考える余裕が出てきたのです。

しかし、17歳になるいまでも、学校には通えず、深夜まで働かなければいけない状態は変わりません。それでも仕事が終わったあとに、30分の勉強時間を



●雇い主にお茶を運ぶ家事使用人
*支援センター…家事使用人の女の子が勉強や家事の仕方を学ぶ場所として、2006年に設立された。現地NGOフルキが運営し、シャブニールがサポートしている。ベンガル語の読み書き、算数などの基本的な勉強、料理や裁縫などの教室に加え、歌や踊り、スポーツなどの遊びの時間もある。93ページ参照。



設けているジュマルさんのがんばりには、心を打たれます。

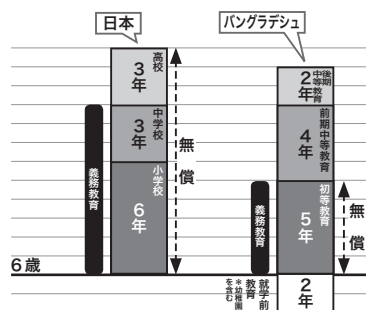
バングラデシュにも、小学校の義務教育制度^{*}や労働者の権利を守る労働法があります。しかし、貧しくて学校に通えない、児童労働を規制する法律を守らないなどの理由から、家事使用人の女の子の権利が守られていないのです。

13歳で雇い主に性的いやがらせを受けたベゲンさん

バングラデシュの大都市チッタゴンの路上で暮らしているベゲンさん（16歳）は、セックスワーカー^{*}をしています。ベゲンさんは、家が貧しかったため、13歳の頃、近所のおばさんの紹介でお金持ちの家に連れていかれ、その家に住み込みで働くようにいわれました。

しかし、雇い主が何度もベゲンさんにいやらしいことをしようとしたので、耐えきれずお母さんにそのことを話し、仕事をやめて村に帰りました。村に帰ってしばらくすると、親せきや村の人たちの間で、ベゲンさんが「働いていた家でレイプされた」というウワサが流れはじめ、村の人たちが白い目でみるようになりました。そんな事実はなかったのですが、「火のないところに煙は

■バングラデシュと日本の義務教育制度のちがい



^{*}セックスワーカー…職業として性的な行為をする人。性別は問わない。体の接触をするだけではなく、性的行動を撮影させたり、性的パフォーマンスをしたりするなど、働き方はさまざま。

^{*}バングラデシュの義務教育制度…初等教育の5年間（6～10歳にあたる）は無償教育で、貧しい家の子どもが学校に通う場合には、政府から奨学金が支給される。女子は8年生まで無償で、進学する場合には奨学金が受けられるなど、男子よりも厚い支援がある。政府の努力もあり、初等教育の就学率は90%を超えるが、中学校の就学率は50%程度にとどまっている。

立たない」とばかりに、ウワサが一人歩きし、両親さえもベグンさんを疑いの目でみるようになりました。

バングラデシュの農村では、結婚するまでの女の子の「純潔」を重視する人が多くいます。女の子が性的被害に遭った場合、家族や親せきの間でウワサになり、被害者にもかかわらず村に居場所がなくなってしまうことがあります。

そのため、女の子たちが、「自分の人生はもう終わりだ」と絶望してしまうケースがあとを絶たないのです。雇い主に性的乱暴を受けたというウワサを流されたベグンさんは、村にすることが耐えきれず、家にあつたお金を持ち出して、家出をしてしまいました。

「もう村には絶対に戻らない。親も親せきも許せない。いまはひどい生活だけど、私はだれの助けも借りずにこうやって1人で生きていくつもり……」

チッタゴンの路上でホームレスになったベグンさんの言葉は、やさしい口調や眼差し、かわいらしい顔かたちとは裏腹に、はげしい怒りに満ちていました。



家事使用人の女の子たちの願い

朝から晩まで働く女の子たちには、自由な時間がありません。「いま一番したいことは？」という質問に対して、11歳の女の子ルビナちゃんが答えた、「動物園に行きたい、遊園地に行きたい」という言葉には胸を衝かれます。

家の中で仕事をしている女の子は、買いものなどをいつけられて、外出する機会を心待ちにしていますが、雇い主は「外に出るとなかなか帰ってこない」「安全のため」といつて外に出したがりません。女の子を危険から守るためといって、一家が外出するときには部屋に閉じ込めて、外から鍵をかけてしまう雇い主さえいます。

「村に帰りたい、帰って遊びたい」「お母さんと一緒にいたい」という女の子もたくさんいます。まだ年端もいかない幼い子が親と離れて暮らし、毎日家事に追われているのですから当然です。また、ほとんどの女の子が「学校に行つて勉強したい」といいます。雇い主の子どもはもちろんのこと、同世代の多くは学校に通っている年齢です。なぜ私だけ学校に行けず働かなければいけない



●バングラデシュの母と娘。子どもの幸せを願う母の思いは万国共通

のかと、自分の置かれた状況を嘆いたとしても不思議ではありません。

バングラデシュでは、何年生まで卒業したのかによって、就ける仕事が変わってきます。読み書き、計算ができればもっと収入のよい仕事に就いて、いまよりはましな生活を送れるかもしれません。おとなになってから自分の子どもを働かすようにすることもなくてすむかもしれません。教育の重要性を女の子たちは十分に理解しています。学びたくても学校に行けないという境遇は、女の子の将来に対するかすかな望みも打ち砕いてしまうのです。

そのほかにも、「テレビを見たい」という声もたくさんありました。雇い主としては、使用人がテレビをみて仕事をしないのはもってのほかなのかもしれませんが、楽しみのない女の子にとって、テレビドラマをみたり、歌を聞いたりするのは、ささやかながら「切なる願い」なのです。